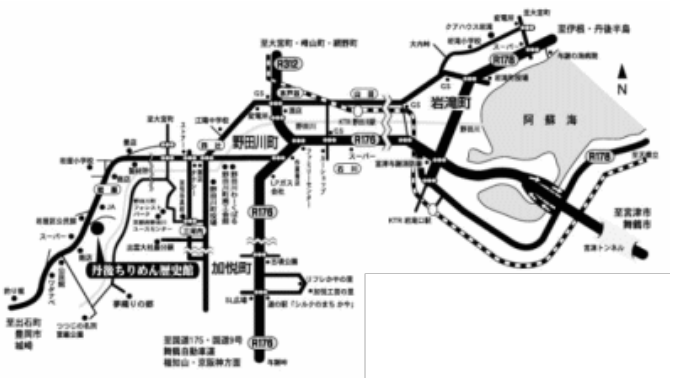
丹後ちりめん歴史館

丹後ちりめん歴史館　レポート（１）

2004年10月28日

●施設概要

所在地：京都府与謝郡田川町岩屋317
電話：0772-43-0469
営業時間：AM9:00〜PM5:00
入館料：無料
定休日：なし（正月三が日のみ）
交通：北近畿タンゴ鉄道野田川線よりタクシー10分・バス15分
URL　http://www.mayuko.com



京都府から兵庫県にかけての日本海側の地域は、丹後（京都府）、丹波（京都府・兵庫県）、但馬（兵庫県）地方として区分される。日本海に面するとともに京阪神大都市圏にも近距離という位置にあり、全域で総人口約72万人、総面積5,667平方キロメートルの規模である。地元では「三たん地方」と呼び、「昭和39年の福知山市（京都府）と但東町（兵庫県）間を結ぶ登尾トンネルの開通を機に、府県境を越えた広域的な地域整備を進めるため、域内49市町が一体となって三たん地方開発促進協議会を設立、以来その整備促進に努めている」という（同協議会）。

日本三景のひとつ、「天の橋立」で有名な丹後地方は、丹後半島一帯のエリアで、「丹後松島」、「屏風岩」、「立岩」、「鳴き砂の琴引浜」など風光明媚な名所が多い。歴史的に、大和文化と出雲文化の交流地、さらに大陸との交易地として発展から、独自の文化が開けていたという。なかでも現代まで脈々と続く文化が「ちりめんの里」、すなわち「丹後ちりめん」の生産である。日本最大の絹織物産地として、日本で生産される和装用の白生地織物では約60％のシェアを誇る。

○奈良時代からの伝統的な地場産業

なぜ、丹後ちりめんが発展したのか。これは「丹後織物工業組合」のサイトに詳しい。要約すると、すでに奈良時代には当時の丹後の国・鳥取で織られた絹織物が聖武天皇に献上されており（正倉院に現存）、南北朝時代（14世紀）には絹織物（丹後精好）の生産が加速した。江戸時代になって、絹屋佐平治らが京都西陣より持ち帰った技術をもとに創織した「ちりめん」が現在の「丹後ちりめん」のルーツである。峰山藩・宮津藩がちりめん織りを保護したこともあり、丹後の地場産業として根付くことになったのである。

現在でも「丹後ちりめん」は、地域の基幹産業であることに変わりはない。約2〜3万人の人々が織物で生計を立てているという。実際に町を歩くと、あちらこちらからちりめんを織り上げる機（はた）の音が聞こえてくる。その多くは夫がサラリーマン、妻が下請けとして家で機を織るという内職的な仕事環境にある。

ビジネスの観点で見ると、丹後ちりめんのピークは昭和30年代、いわば高度成長期にあった。これ以降、貿易の自由化や技術革新等により、価格の安い輸入品の攻勢に晒され、徐々に衰退に向かうことになる。平成になると、危機的な状況はさらに加速、その再生が急務となっていた。特に機織業者は、集まれば廃業や縮小、新規事業への転換等の話題に終始するようになっていたという。　生き残りのために、既に人件費や流通コストからして対抗する意味が希薄な輸入品との対峙を続けるのではなく、技術の伝統と革新による高級品へのシフト、すなわち白生地だけの生産のみならず完成品を販売する高付加価値型産地への転換が始まった。

丹後ちりめん歴史館の外観

こうした新時代の丹後ちりめん製品の「ショールーム」であり、地元の伝統文化を保存・発進する「窓口」機能を発揮するのが、この「丹後ちりめん歴史館」なのである。

次へ

丹後ちりめん歴史館　レポート（２）

○地元の名門織物工場跡を再利用

「丹後ちりめん歴史館」は、三たん地方において丹後と但馬のほぼ中間点に位置する。天橋立から車で15分で、丹後地方の観光名所としての集客を図るべく、周遊モデルコースを提案している。オープンは2001年（平成13年）、年末年始以外は無休での営業で、入館は無料である。

閉鎖した工場

運営は（株）丹後ちりめん歴史館で、実際のオペレーションは民間、すなわち同館建設の発起人でもある今井織物（株）専務取締役・今井英之氏が中心に行っている。同館建設の経緯、背景等は、すべてスタッフの手作りという同館の公式サイトに詳しい解説があるので、ここでは要約を紹介する。

１）歴史館建設の背景

前述のように、丹後ちりめん産業の危機的な衰退がある。既に白生地の生産だけでは輸入品と勝負にならず、高付加価値のある生産、すなわち完成品の販売に生産事業者が取り組む必要性が当事者に認識されるようになっていた。

利用されていない建物は元は女子寮

幡屋の3代目となる今井氏自身も、構造的な不況のが強まった８年前、苦渋の末、着物用白生地の出荷を止めて、8,000万円近い損失を出したという。その後、地元の観光ホテルや道の駅、ＳＣ等に「ＭＡＹＵＫＯ」という店舗を構えて、シルク製品全般を販売。新規事業への転換に活路を開こうとしていたのである。

２）具体化のきっかけ

外観の特徴はノコギリ型の屋根

不況が続く2000年（平成12年）、地元で1903年に操業、1959年の天皇陛下ご成婚の際には、皇后陛下がお召しになった着物を製織したという地元でも名門の織物会社が破綻。土地建物は競売にかけられ、野田川町が落札した場合には分譲住宅での再開発が計画されていた。つまり、由緒のある建物はすべて取り壊され、地域産業を代表していた空間は消滅、土地の記憶も抹消されてしまう。地域のちりめん産業の象徴であり、歴史の証明であった空間が消失するという現実は、不況に直面する当事者にとって素直に受け入れられるものではない。今井氏は野田川町に競売参加の意図を確認したところ、再開発の方向性が規定されている現実を再認識させらる。この事態が起きる前から、今井氏らは野田川町観光産業ビジョンとして「着物の里構想」（シルクビレッジ）を提唱していた。これは観光農園やシルク体験工房等の施設を民間が協調して整備、観光を結びつけて新しい産業活性を図るという内容である。名門織物会社の遺産とその消失を前にして、この構想を丹後ちりめん製織工程の見学コースを備えた、昭和40～50年代体験型のリゾート施設の具体化による実現を決意。そこで、同業の渡辺正義氏、川田信介氏とともに会社を設立して競売に参加、落札を目指すことになった。こうして2000年12月28日、3氏で資本金6,000万年をもって設立した（株）丹後ちりめん歴史館が無事落札したのである。そして2001年秋のオープンを目指して整備に取り組むことになった。

３）コンセプト

「織りから染めまでの体験と見学、デジタル染色の公開工場」
織り上げた生地にダイレクト染色を施したシルク製品を、観光で丹後を訪れる消費者や他分野のメーカーに提案できるアンテナショップとしての役割も果たす。

つまり、崩壊の危機に直面している伝統的地場産業を如何にして再生できるかを課題認識として、地元で工業組合理事などを務める織物業者３名がそれぞれの得意とする絹織物の専門技術を持ち寄り、高付加価値型産地への早期転換を目的として、

・丹後地区に於いて織物とデジタル染色の連携した一貫生産型の工場を開設する
・白生地のみの生産地からの脱却をスローガンとして従来の複雑な繊維流通を省いた新たな販路の拡大を目指す
・この工場のデジタル染色試作品を常設展示販売し、地元繊維業界の従事者には更に技術公開することにより丹後　織物の高付加価値型産地への転換を支援する

・広報ＰＲの手段として取引関係者以外にも丹後にお越しになる一般消費者向けに丹後縮緬の機りと染色工程が視察見学できるよう整備し交流とＰＲを図る拠点空間
との位置づけである（http://www.mayuko.co.jp/rekisi/kannai.html）。

次へ

空間通信
トップ

丹後ちりめん歴史館　レポート（３）

４）規模

敷地面積約4,500坪、建物面積2,000坪である。昭和10年以来の伝統的な建築物であり、一部建物は消防署から利用・公開を制限されている。そのためほぼ半分の空間を使っての施設整備となっている。

施設の周囲はのどかな田園で、しかも近隣から機を織る音、農家にいるガチョウ？の泣き声、山から降りてきて川面を揺らす風の音等、ナチュラルなサウンド・スケープに囲まれている。そこに並ぶ昭和初期の木造建築の中に足を運ぶと、急に子供時代の思い出が自意識を支配してしまう。放課後の学校の教室でラベンダーの香りを嗅いでタイムスリップ‥ではないが、瞬間でも時を駆けらるような気分になれる。

エントランス

５）ターゲット

地元の丹後ちりめん事業者にとって、同館は新時代の織物の総合産地・丹後の象徴だが、吸引対象の中心は観光客にある。地元の織工芸と最新デジタル染色の一環生産の場を公開、文化体験だけでなく、アウトレットショップでの直販、希望に応じて自分だけのスカーフやネクタイを安価（工場出荷価格と同水準）であつらえるサービス（約2週間で納品）も受けられる。

手織り機などの展示物

６）空間環境

基本的に落札した建物にそれほど手を加えずに、建設された昭和10年当時の風情を今に伝えている。2004年(平成16年)6月に開催された「2004建築リフォーム･リニューアル＆コンバージョン設計アイデアコンテスト」では第２位（優秀賞）にランキングされた。

"昭和の工場"そのままの正面エントランスを入ると、左側に展示施設、右側に地元産品の販売店や休憩施設が配置され、その奥に駐車場が用意されている。もともと女子寮があったという。なお、この取り壊された女子寮の先代、戦後まで使用していたという木造2階建ての建築物は痛みが見られるとはいえ、十分に当初の姿を今に伝えている。そこに付属した風呂や洗面設備等、とてもレトロな雰囲気なのだが、消防署尾指導もあって観光客の立ち入りは禁止されている。

実際に生産の現場が見られる

【歴史館本体：デジタル染色の公開工場】

○基本は生産工場の公開空間

歴史館の本体は工場をリニューアルしたもので、エクステリアのポイントはノコギリ型の三角屋根である。工場に北窓からの柔らく安定した自然光を取り入れることにで、3,700本もの経糸の動きが肉眼で検査できるのである。三角屋根によって繊細な絹織物を織り上げる技術が育ったのである。

建物の中に入ると、高い位置から柔らかな陽射しが差し込み、照明との組み合わせによって、多数の歴史的な機織・生産関連機器等の展示物はディテールまではっきりと見ることができる。糸をかける、巻く、送るあるいは分別するといった機能が非常にうまくできていて、精密に動作する様子が強く印象に残るのである。

デジタル染色機器

コンセプトの"織りから染めまでの体験と見学、デジタル染色の公開工場"が示すように、基本的に同館は工場である。生産の現場である。よって、毎日規定の時間は機械がフル稼働する。美術館的な静寂な環境を期待しないほうがよい。稼働している織機・準備機類は、丹後織物工業組合員の平均的な規模だという。ここに最新の高速シルク染色機を組み込み、織りと染めの高付加価値型ファクトリーとして企画・デザインから生産までを実体験してもらう。京都府の和装業界では初めてとなる、織りから染までの一貫生産型絹織物ファクトリーなのである。

デジタル染色で作られた法被

○インターネット経由でも発注が可能なシルク染色

その、丹後ちりめんの新時代を拓く工場として目玉が、

「デジタル式のシルク染色受け付け」機能である。CG、絵画、写真をハイパーシルクを使用したスカーフやハンカチ・ネクタイ・アロハシャツ等に1m単位の小ロットで染め上げる有料のサービスである。さらに着物（訪問着）の場合、デザインの持込みから染め上げまで最短約10日で納品される。オリジナルのシルクネクタイでも２本から同様の期日で対応している。法衣・郷土芸能や祭りに使用される絹衣装等の依頼も多く、なかでも、祭に使用する法被（はっぴ）類は毎年作り直す必要があって、受注が拡大しているという。大阪・岸和田市の有名な「だんじり祭り」でも、関係者が同館に来場したことが契機となって、法被の受注が続いている。

染色サービスは、同館に足を運ばなくても、インターネットで条件と画像をやりとりすることでも注文ができる（http://www.mayuko.co.jp/formmail1.html）。シルク生地の高度な織り技術や前処理技術、染色ノウハウ、後加工処理施設等がそろっている絹産地だからこそ対応できる。織からデジタル染色　常設展示場を完備した工場は日本初で、「小ロットのオリジナル品受注の分野においては大量ロットの輸入商品に全く影響を受けず、海外製品との差別化が図れる」という。

○盛衰を示す工業会発行のカレンダー

丹後の織物産業の歴史的な背景と価値を認識してもらう「歴史館」としての情報発信は、「絹織物の歴史と文化の所蔵品展示」、「丹後染め織り作品展」、「あの頃あの時代写真展」等のような資料展示がその役割を担っている。なかでも印象的だったのが、「丹後ちりめんカレンダーに見る着物の歴史」である。これは、丹後織物工業組合が毎年発行していたカレンダーを展示したもので、すべて当時の女性スターが登場している。しかもカラー印刷技術が未熟だった昭和34年までは、モノクロで作成した後から塗り絵のように人手で色をつけて製作したという。昭和28年の有馬稲子から若尾文子、司葉子、岡田茉莉子そして吉永小百合まで、日本の地方のひとつでしかも地場産業のカレンダーに、銀幕のスターを登場させられるほどの勢いが当時の丹後の織物工業にあったのである。このポスター制作は、昭和41年で続き、その後は発行されていない。まさに織物工業の盛衰を示しているのである。

工場の一角では、さまざまな絹はぎれの切り売り、シルクのネクタイやハンカチ、小物入れ等の販売が行われている。もちろん工場直販ゆえに鮮度と「アウトレット」プライスを訴求する。筆者は母親の土産として薬袋を購入した（非常に好評だった）。クレジットカード決済にも対応しているのは便利であった。

なお、歴史館の別棟、これも旧工場の建物を利用した地元産品販売所でもシルク、織物製品を安価で提供しているほか、地域の名産品、土産物を仕入れて販売している。また、朝市として、近隣農家の取り立て野菜類の直販も行っている。

ちりめん全盛期に作られていたカレンダー。
吉永小百合さんの姿も見られる

さまざまなちりめん製品を販売している

別棟の地元産品販売所

次へ

空間通信
トップ

丹後ちりめん歴史館　レポート（４）

７）運営状況

スタッフは平常時は５名で対応。実演は本当の職人が行っているのは、稼働中の生産工場らしい。この他、女性のスタッフがデジタル式シルク染色の受付や館内案内等を担当する。

スタッフの実演が見られる

来場者は年間50,000人で、年々増加基調にある。地域柄、寒さがいちだんと厳しい冬季は少ない。京阪神在住の来場がほとんどで、ツアーが6割、個人・家族が4割となる。団体が多いのは周辺のカニ観光との周遊コースになっているためで、旅行会社への案内や地元テレビ局でのパブリシティ等を展開している。

女性の来場が多いのは、織物というテーマからして不思議ではない。同館では、織物の一般的な解説、いわゆる「シルク入門」的なアプローチは省略されている。丹後ちりめんの伝統と新しい最新デジタル染色のシルクの誕生のみに絞ったコミュニケーションである。したがってある程度の知識があれば、いくつものサプライズを楽しめよう。この分野に全く縁も興味もないという人には、レトロな敷地内の散策の方が楽しめるかもしれない。昭和10年に建設された工場の施設と跡地を再利用している同館には、今でも当時の女子寮がそのまま残されている（非公開）。「地元産品販売所」は、シルクや織物に興味の薄い諸氏の休憩所としての機能も発揮しているようだ。

なお、この施設は伝統的な地場産業の活性化事業に相当するため、事業化にあたっては行政から1億円の補助が行われた。また、制度的な優遇等を毎年適用することでの補助も続けられている。

丹後ちりめんの歴史を写真で紹介

○空間環境の維持・保全を

歴史館の立地環境は時間が止まったままのレトロ、施設空間は現代から未来に向けての時間の先取りというギャップが非常に印象的であった。地域の最大の資源である伝統的産業が不況で停滞しているにしろ、その解決と未来を目指す歴史館にあっても、周囲の一般家屋からは変わりなく機を織る音が聞こえてくる。それが日常という文化がある。ゆえに、製造技術がITによってデジタルに変貌しようとも、「シルク生地の高度な織り技術や前処理技術、染色ノウハウ、後加工処理施設等がそろっている絹産地だからこそ対応できる」ことが納得できる。

さらに同館は、地域の名門であった織物工場の建物を再利用、手を加えることは最小限に止めている。だからこそ、地域産業を代表していた空間への尊敬。あるいは羨望といった地元の心情も感じられるのである。もし、これをすべてスクラップしてのビルドに進んでいたら、それは地場産業の発展フックとはなりえず、その象徴としての支持は失われていくに違いない。経営は失われてても人々と土地の記憶はそう簡単には消失しない。記憶は人生の、社会の系図である。ひとつの文化を共有している地域にあって、その系の分断は地域の否定に他ならないのである。

昭和10年当時の風情を残している工場の玄関

旧来の建築空間を維持していくのはとても運営コストがかかる。いつかは、安全・防災のために大幅な改修、もっといえば整理が必要になるかもしれない。それまで可能な限り、現在の環境を維持してもらいたい。「丹後ちりめん歴史館」の訴える「歴史」は周辺の環境が保持している。そして「丹後ちりめん」は工場の中で新生されている。

はじめに